

Aichi Gakuin University Junior College
愛知学院大学短期大学部
口腔保健総合研究所
Comprehensive Oral Health Research Institute

日時 令和8年7月2日(木) 17:00～(開場16:30)

会場 愛知学院大学 楠元キャンパス 短期大学部棟 2階 201教室

主催 愛知学院大学150周年事業

愛知学院大学 短期大学部 歯科衛生学科

口腔保健総合研究所

参加費 無料(当日先着80名)



キックオフシンポジウム

記念講演

「口腔から支える有人宇宙飛行、宇宙時代の人を育てる、学際連携が支える有人宇宙飛行の基盤」寺田昌弘

(京都大学 理学研究科サイエンス連携探索センター 宇宙学際研究グループ、特定准教授)

研究所設立の趣旨・概要説明

・ 所長 犬飼 順子 教授

各研究チームの展望

① 地域歯科衛生学チーム

渡邊 幸慧 講師・稲垣 幸司 教授

② 臨床歯科衛生学チーム

原山 裕子 講師

③ 歯科衛生学教育チーム

鈴木 一吉 准教授

④ 基礎歯科衛生学チーム

新野 麻里 講師・近藤 久貴 准教授

⑤ 宇宙歯科衛生学チーム

近藤 久貴 准教授

問い合わせ先

愛知学院大学 短期大学部 歯科衛生学科

口腔保健総合研究所 副所長 近藤 久貴

E-mail: kondoh@dpc.agu.ac.jp

TEL: 052-751-2561(内線1424)



愛知学院大学 短期大学部 口腔保健総合研究所キックオフシンポジウム

プログラム

・来賓挨拶

木村 文輝（学長、教授）

本田 雅規（歯学部長、教授）

安池 修之（薬学部長、教授）

・研究所設立の趣旨・概要説明

犬飼 順子（口腔保健総合研究所所長、教授）

・記念講演

「口腔から支える有人宇宙飛行、宇宙時代の人を育てる、学際連携が支える有人宇宙飛行の基盤」

寺田昌弘（京都大学 理学研究科サイエンス連携探索センター
宇宙学際研究グループ特定准教授）

・各研究チーム代表による展望(30 分)

① 地域歯科衛生学チーム 渡邊 幸慧 講師・稲垣 幸司 教授

② 臨床歯科衛生学チーム 原山 裕子 講師

③ 歯科衛生学教育チーム 鈴木 一吉 准教授

④ 基礎歯科衛生学チーム 新野 麻里 講師・近藤 久貴 准教授

⑤ 宇宙歯科衛生学チーム 近藤 久貴 准教授

愛知学院大学短期大学部 口腔保健総合研究所 開設にあたって

愛知学院大学短期大学部口腔保健総合研究所

所長 犬飼 順子

令和8年4月1日、愛知学院開学150周年を記念して、愛知学院大学短期大学部に「口腔保健総合研究所 (Comprehensive Oral Health Research Institute)」を開設しました。愛知学院大学短期大学部は、歯科衛生士を養成する歯科衛生学科の1学科で構成されており、「歯科衛生学」に特化した研究所です。

歯科衛生士は、かつて”むし歯の洪水”といわれた時代に、むし歯を予防する職業として誕生しました。誕生当初は保健所でむし歯の予防に取り組み、また歯科診療所では歯科医師の診療を補助しながら歯科医療に携わってきました。近年では、少子高齢化や人々の価値観の多様化に伴い、口腔の健康が全身の健康や幸福に深く関わるのが一般に広く知られるようになり、「予防」を業務とする歯科衛生士への期待がますます高まっています。

こうした社会的背景のもと、歯科衛生士の専門分野である「歯科衛生学」を研究・発展させるため、愛知学院大学短期大学部では、歯科衛生学に関する研究を推進する機関として「口腔保健総合研究所」を設立しました。研究所では、ミクロの世界からマクロ、さらには宇宙規模までを視野に入れた研究を推進するため、次の5つの専門研究チームを構成しています。また、本学の教員、学生、地域の歯科衛生士、他機関との共同研究や社会貢献活動を通じて、研究成果を広く社会に還元してまいります。

・地域歯科衛生学チーム

地域社会における口腔保健活動、口腔健康管理、健康支援、地域包括ケアに関する研究を通じて、住民の健康増進に貢献することを目指します。

・臨床歯科衛生学チーム

歯科医療・歯科保健現場における歯科衛生の実践、口腔衛生管理、口腔機能管理、多職種連携に関する臨床研究を推進します。

・歯科衛生学教育チーム

歯科衛生教育の質向上を目的に、教育方法論、カリキュラム開発、次世代歯科衛生士育成に関する研究を行います。

・基礎歯科衛生学チーム

口腔および全身の基礎的メカニズムに着目し、歯科衛生学の科学的根拠となる基礎研究を担います。

・宇宙歯科衛生学チーム

宇宙環境における口腔環境や口腔健康管理方法を研究し、歯科衛生士の新たな専門領域を切り拓く先進的研究チームです。微小重力や閉鎖環境が口腔内および全身に与える影響について探究し、国内外への発信をめざします。

愛知学院大学 短期大学部 口腔保健総合研究所

キックオフシンポジウム記念講演

てらだ まさひろ

寺田 昌弘 先生

京都大学大学院 理学研究科
サイエンス連携探索センター
宇宙学際研究グループ 特定准教授



■ 専門分野

- 宇宙科学・宇宙医学連携研究
- 学際融合による宇宙人材育成
- 有人宇宙飛行を支える基盤研究

■ 経歴（概要）

2009年4月～2014年3月 宇宙航空研究開発機構（JAXA）研究員

2014年4月～2014年9月 東京慈恵会医科大学 助教

2014年10月～2017年9月 NASA Ames Research Center NPP Fellow

2017年10月～2018年3月 東京慈恵会医科大学 助教

2018年4月～現在 京都大学 宇宙総合学研究ユニット 特定准教授

現在、京都大学サイエンス連携探索センターにて特定准教授として宇宙学際研究の推進を担う。「宇宙 × 医療 × 教育」の融合研究を展開。

■ 講演テーマ

「口腔から支える有人宇宙飛行、宇宙時代の人を育てる、学際連携が支える有人宇宙飛行の基盤」

■ メッセージ

宇宙時代において重要となるのは、専門分野の枠を超えた連携です。

本講演では、口腔保健を含めた「人の健康」を軸に、有人宇宙飛行を支える新しい学際研究の可能性についてご紹介します。

地域歯科衛生学チーム

最近発表した論文①：歯科医師の喫煙と禁煙指導の関係

(Watanabe et.al. Tob Induc Dis. 2024. 22:10.18332)



地域歯科衛生学
COMMUNITY
DENTAL HYGIENE

■ 目的

歯科医師の喫煙状況が、禁煙指導にどう影響するかを調査

■ 方法

- ・ 愛知県の歯科医師 3,883 名にアンケート（有効回答 1,301 名）
- ・ 喫煙状況と禁煙指導の実施状況を検討

■ 主な結果

- ・ 喫煙者は禁煙指導に消極的
 - 喫煙者は禁煙指導をしない可能性が高い
(OR = 2.0)
- ・ 喫煙者ほど患者の喫煙状況を把握しない傾向
- ・ 男性の方が喫煙に寛容

■ 結論

- ・ 歯科医師自身の喫煙が医療の質に影響
- ・ 禁煙教育と自身の禁煙が重要

👉 ポイント：

「医療者が吸っていると患者に指導しにくい」

Research Paper

Tobacco Induced Diseases

Attitudes toward smoking cessation according to smoking status among dentists in the Aichi Dental Association in Japan

Yukie Oya-Watanabe^{1,2}, Koji Inagaki^{1,3}, Takahiro Nimi⁴, Yohei Yamamoto⁴, Toshiya Tanabe⁴, Makoto Okai⁴, Nobuhiro Segawa⁴, Toshiyuki Watanabe⁴, Noriyasu Uchibori⁴, Tatsuro Koide¹, Junko Inukai¹, Hidemichi Yuasa⁵, Akio Mitani³, Toru Nagao⁶, Makoto Fuku², Daisuke Hinode²

ABSTRACT

INTRODUCTION The prevalence of smoking, including heated tobacco products (HTPs), among Japanese dentists was reported to be 16.5%, significantly higher than that among Japanese physicians and United States dentists. However, large-scale studies on smoking cessation implementation based on dentists' smoking status and perceptions since the introduction of HTPs are lacking. Therefore, we aimed to investigate and assess dentists' attitudes toward smoking, including HTP use and smoking cessation, according to smoking status.

METHODS A self-administered questionnaire comprising six major items was mailed to 3883 dentists who were members of the Aichi Dental Association in August 2019. The primary outcome was smoking cessation status. The secondary outcome was the impact of smoking on intervention for smoking cessation. This study

AFFILIATION

¹ Department of Dental Hygiene, Aichi Gakuin University Junior College, Nagoya, Japan

² Department of Hygiene and Oral Health Science, Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima, Japan

³ Department of Periodontology, School of Dentistry, Aichi Gakuin University, Nagoya, Japan

⁴ The Aichi Dental

最近発表した論文②：加熱式タバコ（HTP）に関する認識と使用状況

(Watanabe et.al. Healthcare (Basel). 2022. 10(12):2346.)

■ 目的

歯科医師の紙巻きタバコ、加熱式タバコ（HTP）の使用状況とリスク認識を調査

■ 方法

- 歯科医師 1,317 名を対象とした質問票調査

■ 主な結果

- 喫煙率
 - 紙巻タバコ：11.5%
 - HTP：8.5%
- HTP 使用者の約 41%は紙巻タバコとの併用
- HTP 使用者はリスクを理解しているが使用継続
- 「HTP は代替になる」と誤解している者が多い

■ 結論

- 歯科医師でも HTP 使用率は高い
- リスク認識だけでなく正しい教育が必要
- 禁煙支援のためにも医療者の行動が重要

👉 ポイント：

「知っているやめない」「誤解も残っている」



healthcare



Article

Smoking Status and Risk Awareness of Heated Tobacco Product Use among General Dental Practitioners Belonging to the Aichi Dental Association, Japan

Yukie Oya ¹, Koji Inagaki ^{1,2,*}, Keiji Tokumaru ³, Toshiyuki Watanabe ³, Nobuhiro Segawa ³, Yohei Yamamoto ³, Shinsuke Takaki ³, Takahiro Nimi ³, Makoto Okai ³, Noriyasu Uchibori ³, Takahiro Tabuchi ⁴, Akio Mitani ², and Toru Nagao ⁵

¹ Department of Dental Hygiene, Aichi Gakuin University Junior College, Nagoya 464-8650, Japan

² Department of Periodontology, School of Dentistry, Aichi Gakuin University, Nagoya 464-8651, Japan

³ The Aichi Dental Association, Nagoya 460-0002, Japan

⁴ Cancer Control Center, Osaka International Cancer Institute, Osaka 541-8567, Japan

⁵ Department of Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Aichi Gakuin University, Nagoya 464-8651, Japan

* Correspondence: kojikun@dpc.agu.ac.jp; Tel.: +81-52-751-2570

Citation: Oya, Y.; Inagaki, K.; Tokumaru, K.; Watanabe, T.; Segawa, N.; Yamamoto, Y.; Takaki, S.; Nimi, T.; Okai, M.; Uchibori, N.; et al. Smoking Status

Abstract: The awareness of healthcare practitioners concerning heated tobacco product (HTP) use risks has been evaluated; however, few studies have investigated general dental practitioners' awareness regarding HTP-use risks. In this cross-sectional study, we investigated dentists' awareness of the risks of smoking, particularly HTP use. A self-administered questionnaire, including eight questions on conventional cigarette and HTP smoking/using status and both

臨床歯科衛生学チーム

最近発表した論文：歯肉血流速度と炎症の関係

(Watanabe et.al. Cures. 2025. 17(6):e86837.)



■ 目的

歯肉毛細血管の血流速度（BFV）が、歯肉炎症の指標としての可能性を検討

■ 方法

- 対象：歯科衛生学生 22 名
- 毛細血管顕微鏡で歯肉の血流速度を測定
- 歯肉溝内の出血の有無（BOP）や炎症所見で比較

■ 主な結果

- 歯肉溝内の出血がある部位は血流が遅い
 - BOP あり：107.3 $\mu\text{m}/\text{sec}$
 - BOP なし：189.3 $\mu\text{m}/\text{sec}$
- 炎症が見える部位ではさらに遅い
 - 炎症あり：74.7 $\mu\text{m}/\text{sec}$
 - 炎症なし：142.1 $\mu\text{m}/\text{sec}$
- 栄養状態と血流・炎症の関連はない

■ 結論

- 血流速度は非侵襲で客観的に炎症を評価できる指標
- 見た目より早い段階で炎症検出が可能

👉 ポイント：

「炎症があるほど血流は遅くなる」＝早期診断に活用可能

Open Access Original Article

Gingival Blood Flow Velocity by Video Capillaroscopy as an Indicator of Gingival Inflammation

Yukie Watanabe ¹, Koji Inagaki ^{1, 2}, Mari Masuda ¹, Yui Kitamura ¹, Mai Nonaka ¹, Junko Inukai ¹

1. Department of Dental Hygiene, Aichi Gakuin University Junior College, Nagoya, JPN 2. Department of Periodontology, School of Dentistry, Aichi Gakuin University, Nagoya, JPN

Corresponding author: Koji Inagaki, kojikun@dpc.agu.ac.jp

歯科衛生学教育チーム

活動紹介（研究紀要 第34号 2026年3月より抜粋）



愛知学院大学 教育優秀賞を受賞して

愛知学院大学における多職種連携教育（IPE）の構築と展開——教育実践報告——

鈴木 一吉

1. はじめに：教育優秀賞を受賞して

2025年12月3日、愛知学院大学における多職種連携教育（Interprofessional Education：IPE）の取り組みを評価していただき、愛知学院大学から「教育優秀賞」をいただきました（図1）。昨年度は短期大学部（短大）の稲垣幸司先生が受賞されています。本賞は、教育活動において意義のある実践を行った教員に授与されるものです。選考にあたっては、学内外の複数学部・学科との協働によるグループワークの実施、多くの学生への教育経験、教材作成への継続的な関わり等が評価されたとのことでした。これらの取り組みは、私一人では決して成し得ず、各学部・学科の教職員の皆さま、ならびに連携機関のご支援に支えられてきました。この場をお借りして、あらためて深く御礼申し上げます。



図1 教育優秀賞受賞

2. 背景：医療・保健・福祉における多職種連携の重要性

近年、医療・保健・福祉の現場において多職種連携の重要性が高まっています¹。日本では、厚生労働省の報告書²において、地域包括ケアの推進に向け、卒前教育の段階から他職種の役割を継続的に学ぶことの重要性が指摘されています。国際的にも、世界保健機関（WHO）は「Framework for Action on Interprofessional Education & Collaborative Practice」³において、医療職養成課程におけるIPEの重要性を強調しています。

IPEは、「複数の領域の専門職者が連携および患者

ケアの質を改善するために、同じ場所とともに学び、お互いから学びあいながら、お互いのことを学ぶこと」であると英国専門職連携教育推進センター（Centre for the Advancement of Interprofessional Education：CAIPE）が紹介しています⁴。その実践を支えるため、各国でコンピテンシーやフレームワーク^{5, 6}が整備されています。日本では2016年に春田ら⁷が中心となり、医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシーが策定されています。IPEは、患者中心の医療を提供するために不可欠な教育です。卒前教育において、国内の教育機関が共通して参照すべき到達目標として示された「歯科衛生学教育モデル・コア・カリキュラム」⁸や「歯学教育モデル・コア・カリキュラム」⁹には歯科衛生士・歯科医師に求められる基本的な資質・能力として「多職種連携能力」が明記されています。歯科領域は従来、診療所内で完結する傾向が強く、医科との連携が限定的でしたが、近年は誤嚥性肺炎や認知症、栄養管理等口腔と全身の関連が注目され、歯科の役割は拡大しています。

3. IPEの学修形態と合同グループワークの教育的意義

IPEは、講義型、演習型、グループワーク型、実習型等、さまざまな形式で実施¹⁰されています。IPEの方法は、学修者の学年構成や人数、教育目的に応じて多様な手法を組み合わせることが可能です。たとえば、異なる専門職を志す学生が一堂に会して行う問題基盤型学修（PBL）やチーム基盤型学修（TBL）による合同グループワーク、臨床現場での他職種の業務体験や見学、実際のカンファレンスや模擬カンファレンスへの参加、模擬患者を取り入れたシミュレーション実習等、多彩な学修活動が挙げられます。また、講義と演習等を組み合わせる複合的な教育デザインも一般的に用いられています。

これらの中でも、とりわけIPEの特徴的な授業形態として位置づけられているのが、複数の専門職種をめぐず学生が同じ場に集まり、相互作用を通じて学び合う合同グループワーク型の学修です。前述の

CAIPE⁴が示すように、IPEは「ともに学び、互いから学び合い、互いについて学ぶ」ことを核心としており、この理念を具体的に体现する方法が多職種混成のグループワークであるといえます。日本国内では、この合同グループワーク型のIPEが2000年頃から、医療・保健・福祉分野の学部・学科を有する大学を中心に導入され始めています¹⁰。

合同グループワーク型のIPEには、多職種混成の小グループで学修者同士が学び合うことにより、多くの教育的利点が得られることが報告^{10, 11}されています。グループワークを介した直接的な交流は、他職種の役割理解を深めるうえで極めて有効であることが示されています。異なる専門性や職種文化の背景をもつ学生が協働して課題に取り組むことで、各職種の視点や専門性の特徴を相互に理解し、多様な価値観の存在を認識する機会が得られ、他の職種への尊敬の気持ちが涵養されます。また、ディスカッションや事例検討を通してコミュニケーション能力が向上し、患者中心のケアを多角的に考える力が養われることが明らかにされています。これらは、将来のチーム医療に不可欠な姿勢の育成に結びつくもので、専門職としての自己理解やアイデンティティ形成にも寄与する点が特徴です。さらに、グループでの協働的な問題解決過程を経験することは、臨床現場で求められる判断力や実践的な連携能力の基盤形成にもつながるとされています。

4. 愛知学院大学における合同グループワーク型 IPE の構築と展開

愛知学院大学におけるIPEの取り組みも、まさにこのCAIPE⁴の理念に沿った形で展開されています。本学は複数学部をもつ総合大学であり、それぞれの学部・学科が独自の教育を発展させてきました。一方で、こうした特色ゆえに、授業の場において、学部間で学生が交流する機会はこれまで十分には設けられていませんでした。

この状況を変えるきっかけとなったのは2015年頃だと記憶しています。当時、歯学部のカリキュラム委員会の委員であった私は、薬学部の教務の先生とお話しする機会があり、同じキャンパスで学ぶ学生と教員のリソースを活かして合同グループワーク型のIPEを立ち上げる構想が二人の間で生まれました。その後、約1年をかけて準備を進め、上層部の承認、教員間の合意形成、時間割のすり合わせ、会場確保、教材作成、当日の運営体制の整備等、実施に必要な課題を段階的に解消しました。とりわけ上層部の承認は実施予定日まで3か月を切った時期まで調整が続く等容易ではあ

りませんでした。関係部局の理解を得て、2016年12月に、歯学部5年生と薬学部5年生による、愛知学院大学としては初の合同グループワーク型のIPEを実施することができました。この初実施を契機として、翌年の2017年には本学主体の2つ目となる歯学部1年生・薬学部1年生によるIPEが新たに加わり、以後、本学では学内外の学部・学科が連携したIPEがさらに広がっていきました¹¹。こうした取り組みの積み重ねにより、現在では、私が関わるものを含め、愛知学院大学では年間6種類のIPEを継続的に展開する体制へと発展しており、このうち3種類は本学が主体となって実施しています（表1）。

この学びの場は、学生同士の横のつながりを広げるだけでなく、教員同士が領域を越えてつながり、授業づくりの工夫や知見を共有する機会にもなっています。これまで関わる機会の少なかった教職員同士のつながりが自然に生まれてきたことは、IPEがもたらした大きな成果のひとつだと感じています。

さらに、学生の側でもIPEへの関心の広がりを感じています。短大専攻科の昨年と今年の学生が、歯科衛生学科時代の受講体験をもとに、学位取得に向けた専攻研究のテーマとしてIPEを取り上げてくれました¹²。

また、オープンキャンパスでは、私は直接関わっていないのですが、IPEの考え方を取り入れたワークショップが行われる等、授業以外の場にも取り組みが広がりつつあります。IPEの理念が学内で自発的に受け継がれ、より多くの人に広がっていく様子を見ることができるのは、教育に携わる者としてとてもうれしく思っています。

愛知学院大学の学生のIPE参加記録は、私の手元にある資料によると、全国的にもIPEの報告例がまだ少なかった頃の2012年に、薬学部の学生10名が名古屋大学医学部で実施されている「つるまい・名城IPE」（後に短大の学生も参加）に参加した事例が最も古いものとして残っています¹³。翌2013年には、短大の学生が岐阜大学医学教育開発研究センター（MEDC）主催の多施設合同学生向けIPE課外セミナーに参加し、これが短大における最初のIPE参加となりました。短大は2013年および2014年に同セミナーへ継続して参加¹⁴⁻¹⁶し、歯科衛生学科および専攻科（口腔保健学専攻）の有志学生が、医学・看護・薬学・リハビリテーション・栄養・福祉等多様な専攻の学生と合同グループワークに取り組みました。こうした学外での先行的な取り組みは、本学におけるIPEへの関心の高まりを示すものであり、後の学内カリ

表1 愛知学院大学における IPE の沿革 (2012～2025)

2012年	薬学部「つるまい・名城 IPE」参加開始 *参考：2025年度 薬学5名参加 3職種（医学・薬学・看護）
2013年	短期大学部歯科衛生学科・専攻科「岐阜大 MEDC 課外 IPE」参加（2014年まで）
2016年	AGU IPE ①：歯学部5年×薬学部5年 開始 事前学修と半日のプログラム
2018年	短期大学部歯科衛生学科3年 参加開始
2019年	歯科技工専門学校 参加開始 *参考：2025年度 4職種・計329名
2017年	AGU IPE ②：歯学部1年×薬学部1年 開始 事前学修と半日のプログラム
2024年	短期大学部歯科衛生学科1年・健康科学部健康栄養学科1年 参加開始 *参考：2025年度 4職種・計474名 歯学部「愛知医科大学 IPE ワークショップ」参加（2017年のみ）
2018年	歯学部「藤田保健衛生大学 アセンブリⅢ」参加開始 事前・事後学修と半日×3日間のプログラム
	2019年まで：6年生 2021年から：3年生 *参考：2025年度 9職種・計1032名
2023年	AGU IPE ③：薬学部4年×短期大学部歯科衛生学科2年×看護専門学校2年 開始 事前学修と半日のプログラム
	2024年度 健康科学部健康栄養学科2年 参加開始 *参考：2025年度 4職種・計430名
2024年	短大専攻科「つるまい・名城 IPE」参加開始 *参考：2025年度 短期大学部10名参加 4職種（医学・薬学・看護・歯科衛生）

キュラムへの導入を後押しする契機となりました。

その後、短大では学内 IPE への参加を本格化させ、IPE を学年段階に応じて深めていく形でカリキュラムを整備し、2024年度には短大の歯科衛生学科および専攻科の全学年での実施を達成^{12, 17-19}しました。1年生では「糖尿病と歯周病」をテーマに、他職種との協働に必要となる異文化間コミュニケーションの理解、自職種の役割理解、チームワークの体験を中心に、連携の基礎となる内容を学びます。2年生では「認知症」をテーマとして、他職種の理解と尊敬、患者中心の考え方、ナラティブ・ベイスド・メディスンの枠組みを通して、より専門的な視点から連携のあり方を学びます。3年生では「模擬カンファレンス」を題材に、医療現場における職種間の連携や、自職種と他職種との関係性の理解等、実践的な連携能力の育成に重点を置いています。さらに専攻科では「模擬患者を用いたシミュレーション」¹³を活用し、多職種協働に欠かせないコミュニケーションや判断、役割発揮を実際のケースに近い形で経験することで、専門職として求められる連携能力の統合を図っています。こうした段階的・体系的な構成により、学生が自職種としての視点を深めながら、他職種との協働を自然に身につけられるように教育設計を行っています。

5. 私の歩み：学外での学びから学内実装へ

1) 学外での学び(2012年～2015年)：IPE 理念・教材開発・合意形成の経験蓄積

私が IPE に関わるようになった経緯を振り返ると、その原点は2012年にさかのぼります。当時から、私は医療コミュニケーション教育を専門としており、その活動がきっかけとなって、広島大学歯学部が実施していた多職種連携医療教育共同開発事業「医科—歯科連携口腔衛生管理のための多職種連携教育者養成プログラムの開発」に参加する機会をいただきました。この経験は、IPE の理念や教育方法に初めて触れる契機となり、後の活動につながる出発点となりました。

2013年にも継続して同事業に関わり、歯科・歯科衛生領域を含む多職種教育プログラムの開発や合意形成の検討に参加しました。この年度の取り組みでは、模擬患者を活用した教育プログラムの企画が中心となり、複数職種の学生が共通の事例をもとにコミュニケーションや役割理解を深めるためのシナリオと動画の制作が行われました。患者中心の医療をめざす IPE の理念を考えると、模擬患者の存在は極めて有意義であると感じました。異なる職種の教員が協働し、模擬患者を活用した教育内容について議論する過程に立ち会ったことは、IPE の基盤となる価値観や教育構造を

理解するうえで重要な経験となりました。

私が学生対象の IPE を直接経験した最初の機会は、岐阜大学 MEDC により 2012 年から 2014 年の 3 年間にわたり実施された、多施設合同学生向け IPE 課外セミナー（前述）¹⁴⁻¹⁶でした。2012 年は見学の教員として参加し、2013 年および 2014 年は支援教員として関わりました。職種構成は年次とともに拡大し、2012 年は医学・看護・薬学・歯学・理学療法・作業療法の 6 職種・27 名、2013 年はこれらに歯科衛生（本学短大）が加わり 7 職種・38 名、2014 年はさらに食物栄養と社会福祉を含めた 9 職種・49 名で実施されました。グループワークを通して異なる職種を志す学生が生き生きと意見を交わし、自らの専門性を語る姿は非常に印象的であり、将来の専門職としての輝きが随所に感じられました。

2015 年には日本での医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー策定⁷において、歯科領域の代表の一人として合意形成の作業に携わりました。この活動では、医科・看護・リハビリテーション等多様な専門領域の教員と議論を重ね、専門職に共通して求められる能力について検討する貴重な経験を得ました。このことは、IPE に対する理解をより深めるとともに、教育者としての視点を広げる大きな契機になりました。

2) 国内留学と学内での初実施（2016 年）：設計・教材制作・学内実装への展開

2016 年には、愛知学院大学から国内研究員として、岐阜大学 MEDC に特別協力研究員の身分で 1 年間在籍しました。この国内留学中に、同センターが本格実施を開始した合同グループワーク型 IPE に参加する機会を得ました。複数職種の学生が協働して学ぶ授業設計やファシリテーションを直接体験したほか、授業で使用する動画教材の作成にスタッフおよびキャストとして関わりました。教材開発から実際の授業までの一連の流れに携わることで、IPE に求められる教育的工夫や授業デザインの詳細について理解を深めることができました。この経験は、愛知学院大学における IPE 構築において、極めて重要な基盤となりました。

同年 12 月には、本学における最初の学内実施として、歯学部 5 年生と薬学部 5 年生の 2 職種による合同グループワーク型 IPE を実施²⁰しました。これが愛知学院大学における IPE の本格的な出発点となりました。その後、2018 年に短大歯科衛生学科 3 年生、2019 年に歯科技工専門学校本科 2 年生・専修科 1 年生が加わり 4 職種構成となり、現在まで継続^{21, 22}されています。授業は、岐阜大学 MEDC が制作した「脳梗塞で

入院した患者の退院後支援」を題材とした動画教材を用い、模擬カンファレンスを想定した多職種混成のグループワークとして実施しています。2025 年度の参加対象者は合計 329 名（歯学部 5 年生 115 名、薬学部 5 年生 106 名、歯科衛生学科 3 年生 101 名、歯科技工専門学校本科 2 年生 7 名）でした。

3) 拡大と発信（2017 年～）：学内横断の拡充・参加規模の拡大・FD による外部発信

2017 年には、前年の実施経験を基盤として、学内での IPE をさらに展開しました。歯学部 1 年生と薬学部 1 年生による合同グループワーク型 IPE を新たに立ち上げ、「糖尿病と歯周病」を題材としたシナリオを用い、PBL 形式のグループ学修を行いました²³⁻²⁵。さらに同年には、単年度開催でしたが、歯学部 5 年生の有志が愛知医科大学の IPE ワークショップに参加する機会を設けました²⁶。本ワークショップには、愛知医科大学医学部 2～4 年生 6 名、同看護学部 1～4 年生 6 名、名城大学薬学部 5 年生 9 名、愛知学院大学歯学部 5 年生 5 名、愛知県立大学福祉学部 4 年生 1 名、岐阜薬科大学薬学部 1 年生 1 名、日本赤十字豊田看護大学看護学部 4 年生 1 名の計 29 名が参加し、6 大学の 5 職種による混成グループで連携学修が行われました。

以後、歯学部 1 年生と薬学部 1 年生対象の IPE は、2024 年に短大歯科衛生学科 1 年生と健康科学部健康栄養学科 1 年生が加わり 4 職種による大規模 IPE へと発展しました。2025 年度の参加対象者は合計 474 名（歯学部 1 年生 118 名、薬学部 1 年生 165 名、短大歯科衛生学科 1 年生 108 名、健康栄養学科 1 年生 83 名）でした。

また、教員研修（Faculty Development : FD）として、2017 年 5 月から 7 月にかけては、岐阜大学 MEDC が主催した全国規模の IPE FD プログラム「魅力的な IPE を作ろうー IPE を学ぶオンラインコース & ワークショップー」に講師として参加しました。この FD では、オンラインでの情報共有に加え、多職種で構成されるグループによる教材開発ワークショップが行われ、多様な教育実践に触れることができました。これらの経験は、IPE に対する実践的な理解をさらに深めるものでした。

2018 年には藤田保健衛生大学（現：藤田医科大学）の IPE「アセンブリⅢ」に歯学部 6 年生の一部（22 名）が初参加^{11, 27}しました。この年は藤田医科大学、名城大学、日本福祉大学、愛知学院大学の 10 職種の合計 859 名の学生が集まり、TBL 形式のグループワークを行いました。その後、2021 年からは対象を歯学部 6 年生から 3 年生全員へと変更し、コロナ禍ではオンライ



図2 IPE グループワーク

短期大学部歯科衛生学科2年生×薬学部4年×健康科学部健康栄養学科2年×愛知県立総合看護専門学校2年（2025年10月22日 楠元キャンパス 歯学・薬学図書館情報センター4階大教室）

ン形式で実施^{28, 29}しました。2024年からは、全員が貸切バスで藤田医科大学に移動する体制が整い、対面開催³⁰として継続されています。2024年度は、プログラムのテーマを「被災住民に対する支援—医療・福祉系の私たちに何ができるか？—」とし、4大学9学科・合計1,032名の学生が参加対象でした。内訳は、藤田医科大学（医学部3年生117名、医療科学部 医療検査学科3年生・放射線学科3年生238名、保健衛生学部 看護学科3年生・リハビリテーション学科3年生267名）、日本福祉大学（社会福祉学部3年生47名）、名城大学（薬学部4年生256名）、愛知学院大学（歯学部3年生103名、健康科学部健康栄養学科4年生4名）で、半日のプログラムを3日間にわたり実施しました。

4) 学外・地域連携の強化（2023年～2024年）： 学外連携プログラムの拡大と地域大学間連携 の深化

さらに、2023年度からは愛知学院大学主体の3つ目の合同グループワーク型 IPE となる薬学部4年生・短大歯科衛生学科2年生・愛知県立総合看護専門学校2年生による IPE を開始しました。この取組では、看護専門学校との連携にあたって薬学部の先生方が中心となって調整を進めてくださり、その連携体制のもとで学校・学科横断的な IPE を愛知学院大学で展開することができました。これにより、教育対象の拡大が一層進み、多職種間での学びの機会が広がりました。2024年には健康科学部健康栄養学科2年生も加わり、4職種が参加する IPE へと発展¹⁹しました。2025年度の実施風景を図2, 3に示します（写真の使用は学生から同意を得ています）。2025年度の参加対象者は合計430名（短大歯科衛生学科2年生103名、薬学部4年生138名、看護専門学校2年生110名、健康栄養学科2



図3 IPE 振り返り

短期大学部歯科衛生学科2年生×薬学部4年×心身科学部健康栄養学科2年×愛知県立総合看護専門学校2年（2025年10月22日）

年生79名）でした。

2024年度からは、短大専攻科1年生が名古屋大学医学部で開催されている「つるまい・名城 IPE」に新たに加わり¹⁸、地域大学間での連携を強化しました。本プログラムは、臨床実習ローテーションに合わせて同じ内容を定期的実施する半日（90分×2）の IPE で、模擬患者を用いた医療面接のセッションが特徴¹³です。4職種の学生が集まり、1回あたり約20名・3グループで構成されています。同年度、短大専攻科1年生（在籍7名）が3回に分かれて受講しました。専攻科の学生が参加した3回を合わせると、他大学の参加学生は名古屋大学医学部医学科5年生21名、同看護学科4年生18名、名城大学薬学部5年生9名でした。この参加は、名古屋大学医学部と名城大学薬学部とのご縁があり、歯科の視点に関心を寄せていただいたことにより実現しました。歯科衛生領域の教材の作成にあたっては、短大の歯科衛生士の教員に協力していただきました。

6. 学修成果の評価と今後の課題

2023年～2024年度に短大の学生に実施した質問票調査では、「IPE は有意義である」と回答した学生がどの学年でも9割を超えていました。IPE 授業前後の調査では、「職種間の壁を感じる」と回答した学生の割合が授業前より大幅に減少し、さらに、「自職種の立場から積極的に発言できる」と回答した学生が、授業後に顕著に増加することが確認¹⁹されました（本調査は愛知学院大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施：承認番号 24-008）。これらの結果は、専門職アイデンティティの形成およびチーム医療への理解促進に本学の IPE が寄与していることを示唆しています。

基礎歯科衛生学チーム



基礎歯科衛生学
BASIC DENTAL
HYGIENE

臨床研究は、実際の患者さんを対象に治療効果を検証する重要な役割を担います。一方で、根本的に新しい予防法や治療法を生み出すためには、疾患の原因や発症の仕組みを解明する基礎研究が不可欠です。基礎研究により「なぜ効果があるのか」

「どのようなリスクがあるのか」を科学的に理解することができます。基礎歯科衛生学チームは臨床歯科衛生チームでえられた知見に科学的根拠を与えることで、より安全で革新的な口腔医療の実現を目指します。

実験室紹介（研究紀要 第33号 2025年3月より抜粋）

2024年4月、愛知学院大学短期大学部の401研究室に、基礎医学・歯学研究を推進するためのバイオメディカル実験室が設置されました。小さいスペースではありますが、世界基準の実験環境が整っています。また、数名が同時に研究できるように、実験室は細胞培養エリア、実験作業エリア、冷蔵庫エリア、水回りエリアの4つのエリアに分け、導線が重ならないように工夫されています。

2026年現在、文部科学省科学研究費「加熱式タバコによる細胞内ストレス-ARE レポーターアッセイを用いた評価」（基盤研究C 研究代表者 増田麻里）、「生体概日リズムや時計遺伝子は歯周病の発症や進行に関与するのか」（基盤研究C 研究代表者 近藤久貴）などの研究が行われている。

◎細胞培養エリア備品

Thermo Scientific CO₂ インキュベーター 3110、Hitachi 両面型バイオクリーンベンチ CCV-1612W

Olympus 培養顕微鏡 CKX53、倒立位相差顕微鏡 IMT-2

クライオワン液体窒素保存容器 SR-17

◎実験作業エリア備品

細胞用卓上遠心機、冷却遠心機

核酸抽出用高速冷却遠心機 himacCT13R

サーマルサイクラー PCR Ssystem 9700

NanoDrop 微量分光光度計、pH メーター

電子天秤 AXA3002、風防付き電子天秤

ホットスターラー、ダブルシェーカー NR-3

Leica ティッシュプロセッサ EM TP

コロナ吸光グレーティングマイクロプレート

リーダー SH-1300La

◎冷蔵庫エリア備品

Panasonic 冷蔵ショーケース（4℃冷蔵庫）

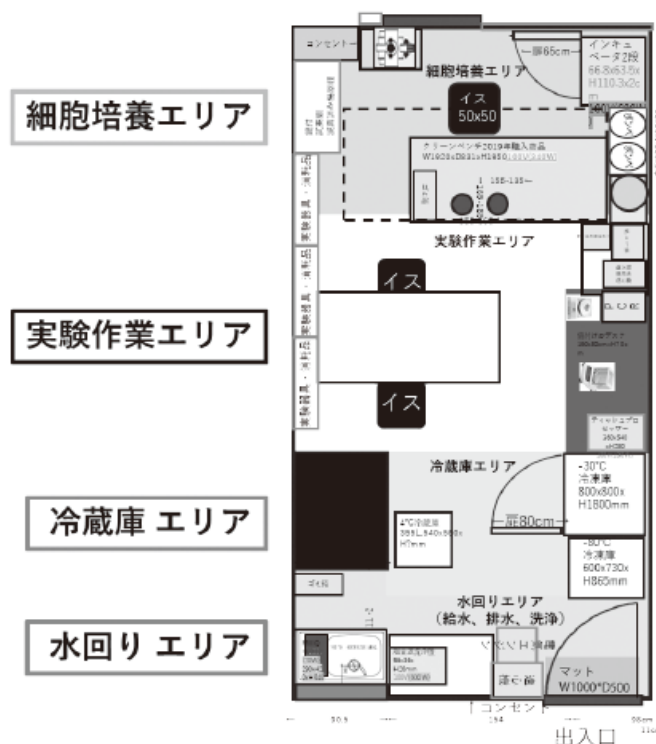
PHCbi メディカルフリーザー（-30℃/-20℃ 冷凍庫）、

PHCbi 超低温フリーザー（-80℃冷凍庫）

◎水回りエリア備品

ウォーターバス、超純水製造装置 Milli-Q® SQ 240

超音波洗浄機、オートクレーブ（短大実習室）



宇宙歯科衛生学チーム

活動紹介①（研究紀要 第34号 2026年3月より抜粋）



日本宇宙航空環境医学会での専攻科学生の発表と受賞のお知らせ

近藤 久貴

愛知学院大学短期大学部専攻科の学生2名が、2025年11月20日～22日に滋賀県大津市で開催された第71回日本宇宙航空環境医学会大会においてポスター発表を行い、その成果が評価され TRAVEL AWARD に加え、Certificate of Presentation Achievement を受賞し、賞金を獲得しました！ 本学会は70年以上の歴史を持つ、宇宙・航空・海中などの特殊環境下での人体への影響や適応を扱う医学領域に特化した専門学会です。

TRAVEL AWARD は本学の学生以外に、慶應義塾大学、東京大学、京都大学、東北大学、東京科学大学、東京農工大学、慶応大学、東京慈恵会医科大学などの学生が受賞しておりました。川瀬さん、野坂さんの挑戦と努力が学会に認められたことを、心より誇りに思います。

発表内容

川瀬瑞貴，増田麻里，内海倫也，杉田好彦，前田初彦，近藤久貴：模擬微小重力環境下におけるマウスマクロファージ様細胞 RAW264.7 の細胞数および炎症性サイトカイン発現動態の解析 第71回日本宇宙航空環境医学会大会（2025年11月21日，大津）プログラム・抄録集 87, 2025

研究内容：マクロファージは自然免疫を担う重要な細胞であり，本研究は微小重力環境による免疫低下のメカニズム解明に貢献するものです。

野坂実里，増田麻里，内海倫也，杉田好彦，前田初彦，近藤久貴：骨芽細胞様細胞株 MC3T3-E1 の時計遺伝子日内変動への模擬微小重力の影響 第71回日本宇宙航空環境医学会大会（2025年11月21日，大津）プログラム・抄録集 86, 2025

研究内容：骨芽細胞は重力を感知する重要な細胞であり，本研究は宇宙飛行による骨密度減少に時計遺伝子が関与する可能性を示す意義深い研究です。

二人の研究は，宇宙環境が生体に与える影響を解明する重要なテーマであり，今後の宇宙医歯学や宇宙歯

科衛生学への発展が期待されています。

当日の様子



図1 11月20日午前会場到着

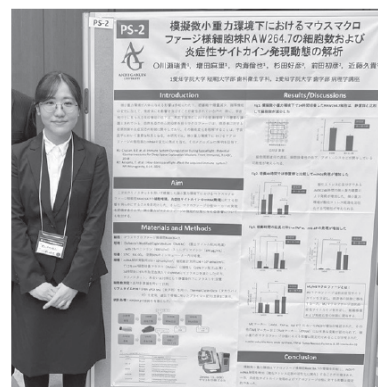


図2 11月20日ポスター発表（川瀬瑞貴）



図3 11月20日ポスター発表（野坂実里）



図4 11月20日1分間のショートプレゼンテーション



図5 11月21日表彰式



図6 賞状を持って記念撮影（左：野坂実里，右：川瀬瑞貴）

活動紹介②（愛知学院大学歯学会 第108回学術大会抄録より抜粋）

4. 有人宇宙飛行に関する海外研修に引率して

○近藤久貴

（短期大学部歯科衛生学科，未来口腔医療研究センター，口腔保健総合研究所）

本研修は有人宇宙飛行に関する理解を深めることを目的として、令和8年3月22日から3月29日にかけて、本学、京都大学、岐阜医療大学の教員らと共同で実施した。本学学生を中心に、慶應義塾大学、東京女子医科大学など他大学の学生も参加した。研修では NASA Johnson Space Center (JSC) を訪問し、研究施設および展示施設の見学を通じて宇宙開発の最前線に触れる機会を得た。さらに JSC の Brandon Macias 教授の協力のもと、NASA 研究者より宇宙環境下における人体の生理的変化や医学的取り組みに関する講義を受け、無重力環境が人体へ及ぼす影響について専門的知見を得た。また Texas A&M 大学を訪問し、宇宙医学研究室の見学および研究者による研究内容の説明を受けた。また、参加学生によるプレゼンテーションも実施し、国際的な学術交流の実践の場となった。さらに JAXA ヒューストン駐在員事務所を訪問し、所長よりアルテミス計画および JAXA の進行中プロジェクトについて概説を受けたほか、米田あゆ宇宙飛行士から訓練の実際、フライトサーजनからその役割について講義を受けた。研修後アンケートでは「貴重な体験であった」「英語学習の必要性を強く認識した」「将来の進路への良い刺激となった」などの意見が多く、高い教育効果が示された。本研修は宇宙医学への理解深化と国際的視野の育成に寄与する有意義な取り組みであった。

愛知学院大学 短期大学部 口腔保健総合研究所キックオフシンポジウム

愛知学院大学短期大学部 FD 委員会協賛

愛知学院開学 150 周年



AICHI GAKUIN
UNIVERSITY

愛知学院大学短期大学部

